

＜今日の説教のポイント フィリピの信徒への手紙 3章 1-11 節＞

1 主において喜んで生きる 1 節

この手紙は「獄中からの手紙」また「喜びの手紙」と呼ばれてきた。初代の伝道活動と教会形成は多くの困難と苦しみがあった。その中で「主において常に喜びなさい」とある。これはキリスト者の信仰生活の基本。主の大きな救いの恵みに感謝する。喜びは感謝から生まれてくる。旧約の 124 編の詩人も「わたしたちの助けは、天地を造られた主の御名にある」と言う。主なる神が味方であることが、感謝と喜びの源である。

2 迷わされずに生きる信仰 2-6 節

2 節になると一転して厳しい忠告。「あの犬ども、よこしまな働き手たち、切り傷に過ぎない割礼」と高飛車な激しい言葉。ここにはパウロ自身の体験に基づく深い反省。彼らは異邦人教会の中のユダヤ人キリスト者。「律法の教え」から脱却できない姿を見る。「肉」とは生きる手段で、抛りどころではない。パウロは自戒をこめ「わたしは割礼を受けた、ヘブライ人のヘブライ人、ファリサイ派の一員、熱心さでは教会の迫害者」と告白。肉なるものからの解放はキリストとの出会いによる。「信仰のみ」の福音理解の深化。自己批判を含まない批判は真実ではない。

3 価値観の転換 7-8 節

肉の頼みである人間本位の価値観の転換。「律法の教え」を守り、実行することは人間には不可能。キリストによる愛と赦しを知らされた喜びの大きさ。このパウロの大きな価値観の変化を宗教改革者のルターも深く味わう。キリストへの信仰による義(救い)。神からの一方的な恵みの救いの経験。人は信仰によって救われる。「信仰のみ」という信仰理解の深化。「神は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みである」(ルター「95 カ条の提題」1 条)。容易に後戻りする人間の弱さ。

4 キリストのうちに今の自分を見出す 9-11 節

「キリストを得る」とは、今までの自分の生き方の延長線上ではなく、自分を捨て、キリストの中に自分を発見すること。人は愛され、理解されずに成長し、充実した生き方を見出せない。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ 2:20)。日々新たに主から生きる力と勇気を得たい。